

(1) 入学試験の枠組みについて：●

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	<p>A群：大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性</p> <p>：入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係</p> <p>B群：入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係</p> <p>：入学者選抜試験実施体制の適切性</p> <p>：入学者選抜基準の透明性</p> <p>C群：学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係</p>
大学院	<p>A群：大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜の適切性</p>

①本学が求める人材を選抜すること、②募集・実施において透明性と公平性が確保されること、③結果が開示されること、に力点を置いた入学試験の枠組み構築を目標としている。

a. 募集条件の開示

本学は、国際的に活躍する作家、専門職業人（アーティスト・デザイナー・研究者等）の育成を目的としている。その目的を達成するために、次のアドミッション・ポリシーを掲げ、どのような学生を受け入れたいのかを明示している。

【アドミッション・ポリシー】

アドミッション・ポリシーとは、大学が教育の理念や特色に沿って示す入学者受入方針のことを言います。

大学選びは、皆さんの将来の職業、生き方を選ぶことです。皆さんが思い描く将来、生き方に役立つ大学を選ぶことが“良い大学選び”だと多摩美術大学は考えます。

皆さんが、卒業（修了）時「多摩美術大学で学んで良かった」と思えるように、あらかじめ多摩美術大学が求める人材像をアドミッション・ポリシーとして決めました。皆さんの“良い大学選び”の手助けとしてください。

（美術学部）

- ・ 芸術に対して広い視野を持つ人
- ・ 自由な発想を持つ人
- ・ 国際的なアーティスト・デザイナー・研究者として活躍する人
- ・ 想像力・表現力・審美眼を具えた人
- ・ 自ら、芸術を切り拓く意力のある人

（造形表現学部）

- ・ 芸術に対して広い視野を持つ人
- ・ 自由な発想を持つ人
- ・ 国際的なアーティスト・デザイナー・研究者として活躍する人
- ・ 想像力・表現力・審美眼を具えた人
- ・ 社会人としての経験を活かす意欲のある人

（大学院美術研究科）

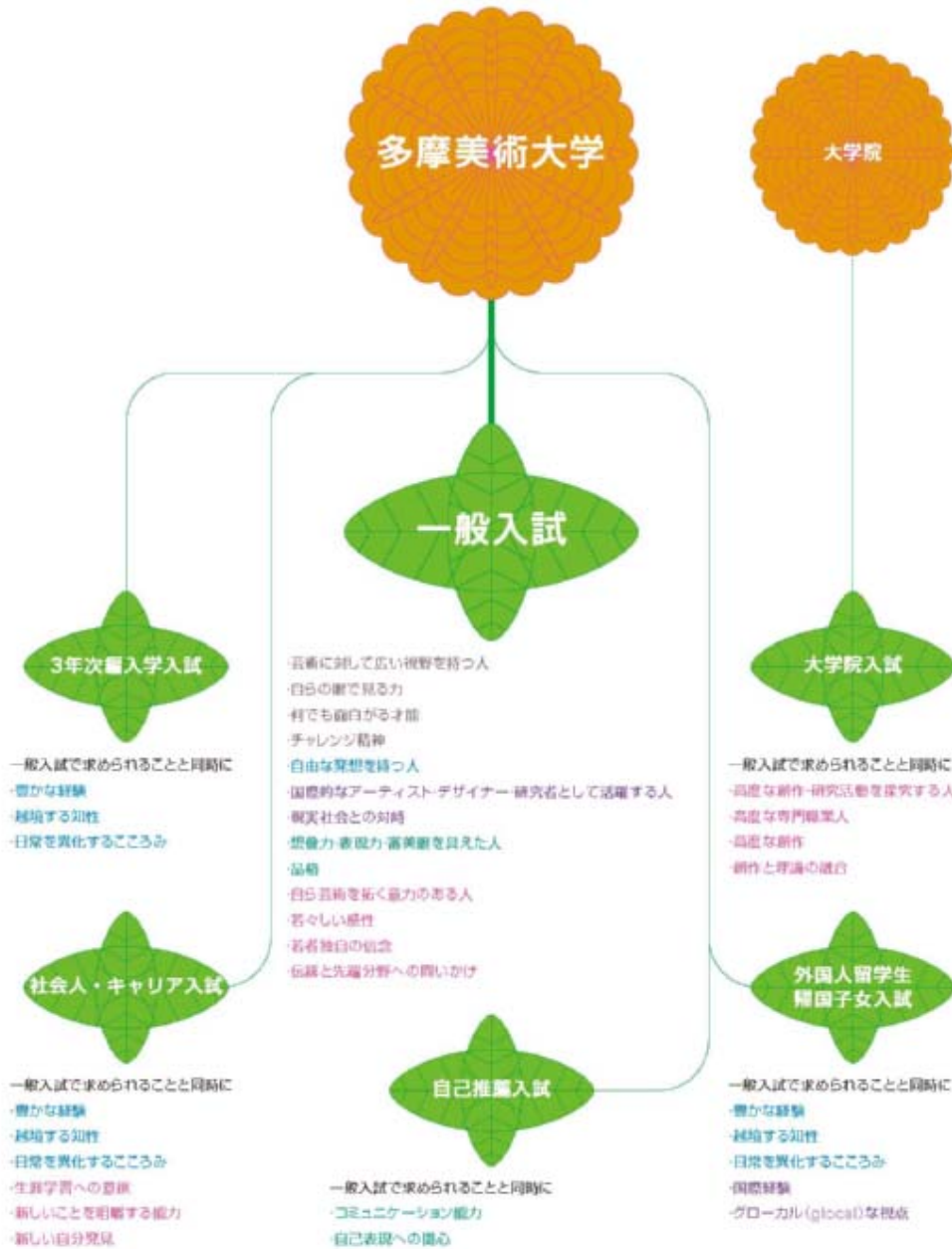
- ・ 芸術に対して広い視野を持つ人
- ・ 自由な発想を持つ人
- ・ 国際的なアーティスト・デザイナー・研究者として活躍する人
- ・ 想像力・表現力・審美眼を具えた人
- ・ 高度な創作・研究活動を探求する人

アドミッション・ポリシーに掲げられている様々な素養を持った人材を広く募集するために、一般入学試験の他に、ある特定の素養を持った人材確保を目的とした特別入学試験を設けている。それにより外国人留学生、帰国子女、他大学からの3年次編入学生のような、様々な経験を持った受験生を受け入れている。

どのような素養を持った人材を、どの入試種別で募集しているかをビジュアル化し、分かりやすく説明する工夫も行っている（図Ⅱ-四-1参照）。

多摩美術大学アドミッション・ポリシー

全学共通+芸術に対して広い視野を持つ人	大学院 + 高度な創作・研究活動を探究する人
全学共通+自由な発想を持つ人	美術学部 + 自ら、芸術を切り拓く意力のある人
全学共通+国際的なアーティスト・デザイナー・研究者として活躍する人	造形表現学部+社会人としての経験を活かす意欲のある人
全学共通+想像力・表現力・審美眼を具えた人	



(図Ⅱ-四-1 入試構成図：入試方法の位置付けのビジュアル化)

さらに入学試験種別毎に次の入試コンセプトを作成し、その中で目的や入学試験科目を明示している。

【美術学部】

（１）一般入学試験（一般方式／センター方式）

【一般方式】

学科試験「国語」「外国語」、および実技試験（１または２科目）を課しています。ただし芸術学科においては「英語」「講義理解力、小論文」を試験として課しています。それによって基礎学力と各学科における専門での芸術性を試します。卒業後国際的視野にたつて社会に貢献できる人材と成りうる学生の育成を目的として幅広い人材を求めています。

【センター方式】

高等学校の段階における基礎的な学習の達成と、大学教育を受けるにふさわしい能力・適性等を多面的に判定するために、大学入試センター試験を学科試験として利用しています。芸術学科においては学科試験（３科目）のみを課していますが、他学科については、学科試験（２または３科目）、および実技試験（１または２科目）を課しています。

（２）外国人留学生入学試験

世界からの優れた人材が、日本人学生と交流を持ち、互いに刺激しあうことで、世界水準の質の高い美術創作が出来る環境を構築することを目的としています。

試験科目としては、『美術に対する考え方』および『日本語能力』をはかるための「小論文」「面接」と、各学科における専門分野の力を見るための「実技試験（芸術学科は小論文）」を課しています。

（３）帰国子女入学試験

異文化で得た貴重な経験や感性を本学で発揮することができます。留学経験がない学生にも大いなる刺激を与える相乗効果を目的とします。

試験科目としては、『美術に対する考え方』および『日本語で表現能力』をはかるための「小論文」「面接」と、各学科における専門分野の力を見るための「実技試験（芸術学科は小論文）」を課しています。

（４）３年次編入学試験

これまでの学びの経験を活かし、さらなるステップ・アップをすることができます。本学生にとっても互いの刺激となり、大学全体の教育の活性化にもつながることを目的としています。試験科目としては、『美術に対する考え方』および『大学の教養課程修了程度の学力』をはかるための「小論文」「面接」、加えてデザイン系学科（情報デザイン学科を除く）においては、専門分野の力を見るための「実技試験」を課しています。

（５）自己推薦入学試験

彫刻学科

一般入学試験では測ることが難しいが、個性豊かで、将来、芸術家としての活躍が期待できる

人材を求めます。「作品資料」「面接」「小論文」では、美術に対する熱意や意欲、そして知識や目的意識などを測り、「実技」では、立体造形とデッサンにより、個性と可能性を測ります。

工芸学科

目的意識が明確で、自己表現力の優れた人材を求めています。『自己表現力』を見るための「書類審査」、『美術に対する考え方』『アートを目指す人にとっては重要な資質である能動性、主体性、自己主張』をはかるための「小論文」「面接」、専門分野の力を見るための「実技試験（静物描写）」を課しています。

【造形表現学部】

〔1〕一般入学試験

基礎学力と各学科における専門での芸術性を審査することで、幅広い人材を求めています。

「国語」と「英語」をすべての学科で試験科目として課し、造形学科では「絵画」、デザイン学科では「デザイン、面接」、映像演劇学科では「創作」と「面接」を『実技』試験として課しています。

〔2〕社会人入学試験

社会人としての経験・仕事と大学での教育を相互に活かすことができます。他の入試種別による入学生にも好影響を及ぼすことを期待しています。

専門分野となる造形学科の「絵画」、デザイン学科の「デザイン」、映像演劇学科の「オーディション資料」により、芸術性を判断する科目を審査します。また「作文」（造形学科・デザイン学科）により、論理的思考力を審査し、「面接」試験においては人間性や作品についての説明による解説力も審査します。

〔3〕映像演劇学科自己推薦入学試験

高校時代の学力だけでなく他分野における経験に基づく個性や将来性を審査することにより、映像演劇分野での隠れた才能の発掘・発見を計ります。

「オーディション資料」の提出を課すことにより個性や秀でた才能を見出し、また「面接」試験においては人間性をはかります。

〔4〕3年次編入学試験

これまでの学びの経験を活かし、さらなるステップ・アップをすることができます。本学生にとっても互いの刺激となり、大学全体の活性化にもつながることを目的とします。大学・短期大学や専修学校卒業者等にこれまで作成してきた作品を「提出作品」として審査することで3年次に相当する能力を試し、面接では人間性をみながら将来性を探り、多様な進路選択とさらなる学修機会の提供を目指しています。

【大学院】

(1) 博士後期課程（博士）入学試験

美術・デザインの全般に通じる幅広い見識と技量を備えた将来の指導的地位につく人材の養成と、学術研究の著しい進展や社会の変化に対応できる総合的な判断力を備えた芸術家や芸術理論家の養成を目指しています。細分化された個々の領域における研究をみるための「提出作品または提出論文」と、それらを包括的に編成した総合的な学問とのバランスをみるために「語学」「小論文」「口頭試問」を課しています。

(2) 博士前期課程（修士）入学試験

美術・デザインについての既得の知識・技能を、更に深め豊かにして、より高度の作品形成に結晶させることを目指しています。美術に対する考え方、大学修了程度の学力をみるための「小論文」「面接」（芸術学専攻については「英語」も課す）と、高度な専門分野の力をみるための「提出作品（論文）審査」を課しています。

入学試験に対する考え方を上記のように詳しく説明している理由は次のとおりである。「入学試験は受験生と大学との契約関係である」と言う観点から、①大学が要求すること、その募集条件が開示され、②受験生がその募集条件に同意した上で入学試験を受け、③その結果が開示されることが、重要であると考えている。それらが担保され、入学試験における公平性・透明性の確保が実現出来ると考えている。

従来より本学が求める人材を選抜するために、それに応じた複数の入学試験を設けて来た。しかし2006年度入学試験までは上述した「アドミッション・ポリシー」、「入試構成図」、「入試コンセプト」のいずれも策定しておらず、本学の入学試験に対する考え方が明示されていなかった。これについては受験生に対し納得性がある情報を提供出来ていないばかりか、「求める人材を選抜する」と言う入学試験の目的を達する上で齟齬が生じかねず問題として挙げられた。

改善方策として、2007年度入学試験より上述した入学試験に対する考え方を策定し大学案内や学生募集要項等に掲載し、受験生に対する納得性とマッチングを高めた。併せて、各入学試験科目の採点基準を掲載することにより、教員による明確な採点と受験生のポイント把握を可能にした。これらの改善方策により、「求める人材を選抜すること」と「募集において透明性と公平性を確保すること」の枠組みが整備された。

b. 入学試験の実施運営－入学試験科目及び入学試験種別

本学は美術大学のため、各学科等のカリキュラムには高度で専門的な実技科目がたくさんある。従って、入学試験科目として各学科等（芸術学科を除く）に関する専門的な技術力を測るための厳しい実技試験を課している。

イ. 美術学部

一般入学試験においては、ほとんどの学科等で実技試験(試験時間：3～6時間)を2日間で2科目課している。このように長時間の実技試験時間を受験生に課すことにより、受験生は本来の力を十分に発揮することが出来る。理論研究系である芸術学科においては、入学後、英語の文献を扱うことから英語が必修となるため、2008年度入学試験より英語を入試必修科目とした。講義系の授業が多く、論文を扱う機会が多いことから、一般入学試験科目として小論文、講義理解力を課している。また「学理の尊重」が本学の理念の一つであることから、全学科等において実技試験だけでなく、学科試験を課している。

さらに、2005年度入学試験より自己推薦入学試験を一部の学科等で始めている。工芸学科の自己推薦入学試験においては、出願時に陶・ガラス・金属の専門領域を決定させ、よりモチベーションの高い学生の確保に努めている。

ロ. 造形表現学部

一般入学試験で同様に1科目6時間の実技試験を課し、厳しい選抜方法と受験生が十全に力を発揮できる試験方法を探っている。

また2005年度入学試験より映像演劇学科では自己推薦入学試験をはじめ、受験生の活動歴や物事に打ち込んできた意欲等を審査し、映像演劇界での可能性を見出せる人材の確保に努めている。

上記のとおり、複数の入学試験方法を設け、様々な素養を持った人材を広く募集することに取り組んでいる。しかしながら、自己推薦入学試験において入学までの拘束の手段としての課題等を設けていないことから、過去に数名であるが未手続者や入学辞退者が出ている。

改善方策として、2008年度入学試験より自己推薦入学試験を始める美術学部彫刻学科において、合格者に「入学前プログラム」を実施する。入学までの準備期間を有効に活用し、専門実技の意欲をより高めるためのプログラムを提供することとなっている(入学者へのフォローアップ)。

また美術学部の一部学科等において実施されていた大学入試センター試験を、2008年度入学試験より美術学部全学科等において導入する。これにより地方の学生への負担軽減に努めている。

なお、本学ではAO入試は実施していないが、現在の入学試験種別が適切であると判断しているからである。

c. 入学試験実施体制

入学試験における組織構築の取り組みとしては、教務部長を中心に入学試験組織図を作成し、研究室・事務職の役割を明確にしている。また、危機発生時フローチャート（入学試験期間内・合格発表後）を作成し、危機管理に努めている。これらを作成する際には必ず入学試験委員会に報告し、委員会内で検討されている。

具体的に次の実施運営の取り組みが挙げられる。

イ. 入学試験システム

前年度からの入学試験変更点にともなうシステムの変更（配点変更、プログラム変更）点をシステムチェック表として作成し、チェックしている。事前に仮データを入力することにより、正しく機能するかをチェックしている。

ロ. 入学試験問題の出題ミス防止

近年、他大学で生じている試験の出題ミス事例を洗い出し、「問題作成における注意事項」を作成し、チェック形式により教員が確認するようにしている。

ハ. 面接試験

実施前に各学科等へ「面接試験における注意事項」を配布し、質問内容の公平性を保つよう教員に注意を促している。

ニ. 学科試験科目の予備問題

予備問題を作成することにより、万が一の問題漏洩等に備えている。

従来より適正な入学試験実施に関する対策を行って来た。しかし、チェックリストなどを用いていたのは「イ. 入学試験システム」のみであった。近年、各大学で頻発する入学試験ミスの事例を見ると「確認を怠った」、「思い込んでいた」などのヒューマン・エラーに拠るところが大きい。チェックリストなどを用いないチェック方法は入学試験ミスの可能性をもたらす一要因であり問題点として挙げられる。

改善方策として2007年度入学試験より上述したチェックリストなどを策定し、ヒューマン・エラーを排除する対策を行った。これらの改善方策により、「実施において透明性と公平性を確保する」体制が整備された。

d. 入学試験結果の開示

一般入学試験においては、1997年度より「入学試験作品集（現：新入生入試参考作品集）」を発行して、各学科等の科目ごとに、出題のねらい・意図、採点のポイントを掲載している。2005年度より自己推薦入学試験についても同様に掲載を行っている。

外国人留学生入学試験、帰国子女入学試験、3年次編入学試験においては、入学試験結果資料、入学試験問題、出題のねらい・意図、採点ポイントをホームページに過去5年分掲載しダウンロードを可能としている。

また成績開示を美術学部の一般入学試験、及び造形表現学部の全入試種別において実施

し、受験学科等の科目ごとの得点を受験生の要望に応じて開示している。

これらにより「結果が開示される」体制が整備されている。

(2) 多様なニーズに応える措置：●

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	C群：夜間学部、昼夜開講制学部における、社会人学生の受け入れ状況 ：編入学生及び転科・転部学生の状況
大学院	A群：他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況 B群：社会人学生の受け入れ状況 C群：外国人留学生の受け入れ状況 ：留学生の本国地での大学教育、大学院教育の内容・質の確定の上にした学生受け入れ・単位認定の適切性

多様なニーズに応えること、本学が求める人材を選抜することを両立した入学試験方法を整備することを目標としている。

a. 大学院における他大学・大学院の学生に対する門戸開放

大学院美術研究科博士前期課程（修士）及び後期課程（博士）の過去3年間の入学試験状況は次のとおりである。

募集人員134名の博士前期課程（修士）においては、志願者はおおよそ200名で、うち他大学出身者が約4割となっている。合格者はおおよそ135名で、うち他大学出身者は3割程度である。

博士後期課程（博士）においては、募集人員7名に対して、志願者はおおよそ15名程度、うち他大学院出身者は5名程度である。そして7名の合格者のうち他大学出身は0～1名である。大学院美術研究科全体から見ると、他大学出身者の受け入れ状況は比較的高く、門戸が開かれていると言える。

b. 社会人の受け入れ

イ. 夜間学部（造形表現学部）

社会人入試については、比較的安定しており、志願者数は70～110人の中で推移している。合格者についても、募集人員を若干増やしたことも関係し、微増傾向となっている。入学定員200名のうち72名が社会人入試の募集人員となり、全体の約35%である。このように社会人の学習ニーズの高まりを受けて、次の対応を行い社会人の受け入れを促進し

ている。

- ①試験科目について、「国語」や「英語」と言った画一的な科目により審査せず、社会人としての総合的な能力をみるために、「作文」試験や「面接」試験を行っている。
- ②ユニバーサルアクセスの時代に備え、デザイン学科では2007年度より社会人入試枠の募集人員を50名に増やした。
- ③学業と職業の両立を配慮し、過去に他大学や短期大学における既修得単位の認定(基礎教育科目対象)を行っている。基礎教育科目が開講される金・土曜日の時間負担を軽減し、社会人学生が求めている専門教育に充てる学習時間の確保を行っている。

社会人の学習ニーズの高まりと大学の対応の相乗効果により、社会人学生の受け入れは順調であると言える。

ロ. 大学院（大学院美術研究科）

大学院での社会人再教育のニーズに応えるかたちで、博士前期課程（修士）において、主に社会人を対象とした夜間主コースを設けている。入学者は過去5年間平均12名であり、その約40%（平均5名）が社会人であった。この結果から、夜間主コースの目的が達成されていると言える。

c. 編入学生及び転科・転部

学修機会の多様化、門戸開放という観点から、美術学部、造形表現学部とも若干名を受け入れる形で、3年次編入学試験を行っている。志願者数は2003～2007年度までは80～100名で推移していたが、2008年度入試では124名と激増した。またここ数年、美術学部においては留学生受験者の増加が著しい。合格者についても毎年20～40名前後で推移している。

転学部・転学科については、毎年試験に45～55人程度の志願者があり、10～15名前後の合格者というのが、過去5年の実績である。

d. 外国人留学生の受け入れ

外国人留学生は大学院、学部、研究生を合わせて127名在籍している。韓国、中国、台湾の3つの国と地域の外国人留学生で89%を占めている。他にタイ、ミャンマー、インドネシア、バングラデシュ、オーストラリア、スウェーデン、ポーランド、マケドニア、アメリカ、コロンビア、ペルー、ヨルダン、南アフリカ、レバノンの計17カ国・地域からの学生が在籍している（2007年10月1日現在）。

更なる留学生確保を目指すための改善方策として、2007年度より英語のホームページを充実させた。また、2008年度より中国語・韓国語のホームページを新たに設ける。

イ. 美術学部

留学生入学試験は各学科等若干名の募集人員で実施している。志願者は2003～2006年度までは40～50名、合格者は15名程度で推移していた。2007年度には志願者96名、合格者27名と倍増した。これは、海外へ積極的に資料を送付することや、海外からの多くの見

学者に誠意を持って対応した現れだと言える。

ロ. 造形表現学部

留学生の受け入れは行っていない。

ハ. 大学院美術研究科

博士前期課程（修士）における平均留学生数は、過去5年間で全入学者の約10%にのぼっている。博士後期課程（博士）においては、7名の入学定員に対して、過去5年間で平均3.4名である。

大学院入学試験においては留学生枠がないため、日本人と同等の入学試験に合格しなければ入学出来ない。つまり日本語の試験を課すことにより、文化や言葉の違いのある留学生の中から、より質の高い学生を確保することが出来る。

大学院には優秀な国費留学生が博士前期課程（修士）に4名、博士後期課程（博士）に3名在籍している。博士後期課程（博士）入試において、小論文と語学については、留学生は日本語と英語のいずれかでの記述が可能である。これにより国際的な学生を確保出来ている。

しかし大学院の国費留学生については、研究生として受け入れるが、入学試験を経て博士前期課程（修士）に入学しても英語力はあるが日本語の授業参加が難しい者がいるので、英語での授業開講、または日本語初級授業を設けるのが今後の課題である。

エ. 帰国子女学生の受け入れ

帰国子女入学試験は、美術学部で各学科等若干名の募集人員で実施している。志願者は2003～2007年度までは10～20名で推移しており、合格者は4人程度である。海外子女教育振興財団主催の帰国生のための学校説明会に毎年参加するなど、積極的に帰国子女を受け入れるよう努力している。

フ. 自己推薦入学試験

2005年度より美術学部工芸学科及び造形表現学部映像演劇学科において、自己推薦入学試験を導入した。工芸学科において20名の募集人員で実施している。志願者は過去3年で66名、65名、40名と推移している。

造形表現学部映像演劇学科で現役高校生等を対象実施しており、志願者は過去3年で44名、55名、55名と推移している。比較的志願者倍率が高い等の理由から2008年度入試より募集人員を20名から25名に増やした。

上記2学科で受け入れ結果から、モチベーションの高い学生確保が出来ていると考え、2008年度より美術学部彫刻学科においても自己推薦入学試験の導入を行う。

(3) 入学試験の検証：◎

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	<p>A群：学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と入学者数の比率の適切性 ：定員超過の著しい学部・学科等における定員適正化に向けた努力の状況</p> <p>B群：定員充足率の確認の上に立った組織改組、定員変更の可能性を検証する仕組みの導入状況 ：各年の入試問題を検証する仕組みの導入状況</p>
大学院	<p>A群：収容定員に対する在籍学生数の比率および学生確保のための措置の適切性</p>

①志願者数、定員充足率等から教育研究組織等のあり方、②入学試験問題そのものの適切性の2つの観点から入学試験の検証を行うことを目標としている。

a. 教育研究組織等のあり方の検証

1998年に美術学部、1999年に造形表現学部の改組転換、2001年には大学院美術研究科博士後期課程美術専攻を設置した。このような組織改編については、入学試験結果及び社会のニーズ等を総合的に検証し実施して来た(Ⅱ-一.理念・目的・教育目標 P.11-13 参照)。

入学定員数については、入学試験委員会、教授会で審議され適切な対応をとっている。美術学部の入学定員超過率は、2005年度までは平均して1.2を超えていた。2006年度より入学定員増を行い、2006年度と2007年度は1.10、1.11と適正化を進めている。特に超過率が高かった芸術学科については2006年度より入学者を減らし、超過率が1.09となった。

造形表現学部の入学定員超過率も同様に2005年度までは1.2を超えていたが、2006年度、2007年度はそれぞれ、1.13、1.08と適正化を進めている。

大学院においては、より高度な専門職・研究者を育成する目的であることから、入学者の質を確保するために入学者が定員に満たない場合もある。しかしながら彫刻専攻においては、2004年度～2007年度まで定員割れの状態が続いているため、改善方策として2008年度より2次募集を実施し、優れた人材を選考する機会を増やした。

定員充足率については、早くからの組織改組(Ⅱ-一.理念・目的・教育目標 P.11-13 参照)により現在のところ全く問題はない。定員超過率についても問題ない。しかし本学は「きめ細やかな指導を実現する少人数教育体制」を掲げているため、上記のとおり厳しい定員管理を行っている。いわゆる一般大学と異なり、少人数制による高い専門教育を行っているため、この厳しい定員管理は高く評価出来る。

b. 入学試験問題の検証

入試問題を検証する仕組みとしては、まず各入学試験後に開催される判定会議内で、各学科等から試験科目内容・評価・問題点などが報告される。

その後、美術学部においては各学科等及び入試課が、造形表現学部においては各学科等及び造形表現学部事務部がそれぞれ入学者選抜方法の適切性について検討し、入学試験委員会で報告を行う。再検討したのち、教授会の議を経て、次年度の入学試験科目に反映させている。




公式な委員会等を通じ検証がなされている現在の体制は妥当であるが、形式的になる可能性も排除しきれない。改善方策として、2008年4月より入学試験委員会、入学試験運営委員会の体制を見直すこととなった（Ⅱ-十一. 管理運営P.181-187参照）。これにより、形式的なチェック体制に陥らず、より確実性のある質の高い検証が可能になるものと考えている。

(4) マッチングのための情報提供：◎

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	C群：高校生に対して行う進路相談・指導、その他これに関わる情報伝達の適切性

「思い描いていた授業内容と、実際は違っていた」と言ったミスマッチを避けるために、高校生・受験生の段階に応じ、より具体的な情報提供を目標としている。

高校生・受験生の段階に応じ、高校ガイダンス、オープンキャンパス、進学相談会の3つの情報提供機会を設けている。高校ガイダンスでは高校生に進路選択の情報を与え、オープンキャンパスでは本学を知って貰い、進学相談会では入学試験情報を提供するという段階的活動となっている。

高校ガイダンス	オープンキャンパス	進学相談会
“きっかけ作り”	“多摩美を擬似体験”	“入試相談”
		
美術・デザイン分野の教育内容を広く知ってもらうきっかけ作りと考えている。基本的に高等学校からの依頼によって出席するようにしているが、受験実績校や美術科設置高校だけでなく、興味がある生徒がいればどの高等学校にも出席している。	キャンパスを開放し、授業やワークショップ体験により本学を理解して貰う。来場者に楽しんで貰える内容に重きを置くなど、進学相談会と差別化を図っている。	受験生に対して主に入試の相談会であり、入学者の入試作品の展示を主とし、本学に関する資料の提供や、進学について個別に相談に応じる場としている。

イ. 高校ガイダンス

【内容】

出来るだけ高等学校の要望を聞き入れ、対象学年によって説明の内容を変えている。1・2年生には領域の説明や就職の話を中心とする。3年生には本学の説明が中心となる。

Ⅱ一四. 学生の受け入れ

また事務職員による説明会だけではなく、教員による模擬講義を実施し領域の魅力を伝えることも行っている。

【開催・参加者実績等】

通 年

※高等学校からの年間依頼数約 300～350（説明会参加約 150～200 校、模擬講義参加約 10～20 校）

【評価】

高等学校では授業の一環として生徒を参加させているので意識が高い生徒ばかりではない。その中で、どう美術・デザイン分野に興味を持って貰うか、またそういう生徒がさらに深く勉強したいと思うような話を出来るかが重要となる。現在本学への依頼が年々増えているのは、高等学校の現場からも生徒のモチベーションが上がると評価を受けているからである。単に受験の案内ではなく、大学において何を学ぶのか、また大学を卒業して何をするか、そのために今何をやらなければならないのか、を高校生が主体的に指向して行くような情報提供を行っている。

ロ. オープンキャンパス

【内容】

来場者は自由に大学内を歩き、施設内に入り、教職員・学生と言葉を交わすなど、実際に見て体験することが出来る。キャンパスツアー、公開授業、公開講評会、公開デモンストラクション、ワークショップ、作品展示、個別相談など、学科等それぞれの特徴を活かしたメニューを用意している。できるだけ非公開の場所を作らない努力もしている。

日常の授業を公開し、受験生が入学後の授業を擬似体験することが出来、マッチング効果が上がっている。参加者数も毎年増加し、退学者の歯止めにも効果がある（大学基礎データ・表17参照）。

【開催・参加者実績等】

八王子キャンパス：年 2 日間開催（7 月中旬）

上野毛キャンパス：年 3 日間開催（7 月中旬）

年 度	2004	2005	2006	2007
来場者数（名）	4,397	4,304	4,495	5,306

【評価】

全国から来場者がある。八王子キャンパスでは施設拡充計画もプラス材料となり、1 日では見切れず 2 日間参加する来場者もいる。また 1998 年の開催当初からオープンキャンパスは学生の自主的な力で運営されており、学生の生の声が聞けることから外部からはとても好感を呼んでいる。他大学がどんなに経費をかけても真似することが出来ないのは、本学の財産でもある学生の力であり、来場者はその仲間になりたいということでモチベーションが高まっているのがアンケートからもよく読み取れる。

【来学者のコメント】

・やっぱりどこでもそうでしょうが“百聞は一見にしかず”だなぁ、と思いました。

これからの自分の人生において、この大学に情熱を注げられるかどうか、1回だけでなく何回も来てみて確かめてみるつもりです。

- ・夜の学校ということで学生はもっと疲れているのかと思いました。実際はとても良い雰囲気ぜひ受験して同じ場で学びたいと思いました。ありがとうございました。
- ・プロダクトというものが身近に感じられました。親切に詳しく説明して下さったプロダクトの教授・学生に感謝です。
- ・ガラスの制作現場がとても印象的で面白かったです。22日の夕方に見た大きなガラスを作っている時、失敗しちゃった様子が見ていてハラハラして楽しかったです。自分もしてみたいなと思いました。

ハ. 進学相談会

【内容】

入学試験作品の展示と個別相談が基本であるが、東京会場では、講堂で多くの参加者を一堂に会して各学科等で入学試験作品の解説や、カリキュラムの特徴などを伝える場を設けている。

地方都市では特に受験生の多い地区で、4美術大学（女子美術大学、東京造形大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学）合同の説明会を開催し、受験生の便をはかりながら、各大学の比較が出来るようにしている。業者を介しての説明会も開催しており、美術・デザイン領域の説明会とし、大学だけでなく専門学校も加わっている。最近は高校1・2年生の参加も多い。

2004年度から長野、2005年度から宇都宮、2007年度から金沢でも進学相談会を開催するなど、地方にも門戸を開いた。

【開催・参加者実績等】

全国12都市で開催（6月から8月）

年 度	2004	2005	2006	2007
来場者数（名）	3,557	3,505	3,709	4,676

【評価】

入学試験種別の趣旨、入学試験と入学後のカリキュラムの関係、卒業後の進路選択など、今学んでいることが受験勉強に留まらないことを理解して貰う場となっている。また個別相談では参加者が持参した作品を教員が講評する場面もあり、生徒の真剣度を強く増している。

【来学者のコメント】

- ・刺激を受けた。諦めていたけどやる気が出た。
- ・授業内容、施設など色々教えてもらった。ぜひ、うちに来て、という気持ちが伝わってきた。
- ・「実技より知識、自分の将来に役立つことは何か？」という話に感動しました。一日中、デッサンしていたのでショッキングでしたが、当然の事に気付かず何も考

えていなかった事に気付きました。

本学は各学科等の専門性が非常に高く、マッチングは非常に重要である。安易な選択は入学後の進路変更に繋がりがねないからである。一般的な受験直前の学部選択ではなく、高校生・受験生が自らの進路を主体的に考えるための情報を提供する本学の取り組みは高く評価出来る。

(5) その他：◎

適用	記述に係る主要点検・評価項目
大学・学部	A群：退学者の状況と退学理由の把握状況

退学理由の把握を正確に行い、諸制度設計の一助とすることを目標としている。

a. 退学者の状況

退学者の状況については、美術学部の退学者数は年間60名前後であり、比率としては約1.7～1.9%に留まっている。退学理由としては、学費の安い国立大学への進路変更が多く、経済的理由を含め学費未納者も目立っている。

造形表現学部の退学者については、年間30名前後であったが、2006年度は50名を超え、3%前後から5.4%となった。これも経済的理由、進路変更による退学者の倍増が要因と見られる。また、両学部とも成績不振による連続留年者も退学者の大きな理由でもある。

退学手続き時には、基本的に全員と面接を行い退学理由の正確な把握に努めている。把握した退学理由については、教授会・大学院委員会で報告を行い、今後の指導等に生かすべく取り組んでいる。

昨今の経済情勢に起因する経済的理由については如何ともし難い側面があるが、他大学と比較し極めて退学者数が少ない(大学基礎データ・表17参照)ことは、アドミッション・ポリシーの明示や情報提供機会を複線的に設け、目的意識の高い学生を確保出来ているからと言える。

